

# ◆2016年8月30日 小石川中等教育学校

奈良本俊夫 校長先生 土方賢作 副校長先生

インタビューその1

©森上教育研究所



<左:都立小石川中等教育学校 奈良本校長 右:森上教育研究所 特任研究員 若泉 敏>

若 泉：今日は、小石川中等教育学校が行う適性検査で、本校の教育活動の適性に合った力、子供の資質や学力をどのように測ろうとしているのかをまず話していただき、次に、選抜を経て入学した子供たちが、本校の教育課程の中で、どのような力を発揮し、どのように成長していくのか、教育活動を具体的にお話していただきます。

奈良本校長：学力検査と適性検査の大きな違いの中に、1+1が2になるような、答えが一つしかない問題ではなくて、生徒が自分で考えて、自分のアイデアを、根拠をもって答案として記述しているかを中心に見る問題。その力が測れる問題を適性検査として作っている。基礎基本はもちろんのことながら、自分で考えて自分で判断して、それを的確な表現で根拠をしっかりと明白に述べながら、自分の考えをきちんと述べていく。それが適性検査問題です。本校が一貫して出題している適性Ⅱの社会科の部分については、これまで、力の差がはっきり出てきています。教科横断的なものが適性検査にはどうしても求められますので、社会科だけではなくて、算数の計算力もしっかりとそこで問いたいと。やっぱり計算力は大事なので、そこを重視している。グラフとか計算しながら、割合とか計算しながら、できたものを見て、どういう傾向があるのかとか、

どうということが今後必要になってくるとか、課題が見えてくるわけですね。それは計算だけにとどまらない。課題を見抜いていくために必要なプロセスであるということで、そういったものを検査で維持しています。適性IIIも独自の問題です。算数分野、理科分野、一番本校の特色となるものですから、譲れないということで適性IIIをやる。考えさせるという問題では、適性IIIはふさわしい問題だと思いますので維持してきました。

若 泉：東京都立小石川中等教育学校は、東京府立第五中学校、都立小石川高校の校訓を引き継ぎ2006年に6年制中高一貫教育校として開校しました。入学選抜は全国的にも最高難度レベルの適性検査問題を検査Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの各45分で実施しています。このうち、都立校共同作成問題は検査Ⅰ（国語読解作文）・Ⅱ（大問1算数、大問3理科）となっています。検査Ⅱの大問2（社会総合）とⅢ（理数総合）は独自問題ですが、検査Ⅰについては開校当時から実施した問題形式と課題を継続しており、実際上は小石川独自問題といえます。100点満点で配分をみると検査Ⅰと検査Ⅲは100%、検査Ⅱ大問2が40%で、合計300点中240点は、小石川中等が測りたい適性の力を、従来の出題で一貫して問うていることとなります。奈良本校長が繰り返し強調していたことは、「自分で考えること、考えるときに資料等の根拠をしっかりとふまえて（事実に基づいて）、判断し考察して、的確に分かりやすい表現で記述すること」でした。そして「知的好奇心」をもつ子供に入学してきてほしいと期待していました。

奈良本校長：選抜を経た生徒を、さらにどのように伸ばしていくかが、入学してからの問題。適性検査で測った思考・判断・表現力をつけるためには当然、前期課程の中で基礎基本を徹底してやっていくわけです。さらに、さまざまな考え方、理由づけ、判断力、的確に述べるコミュニケーションなどを、活動を通して育てています。たとえば、国語の授業の中で単に国語の教科書を使って、要旨や主題、事柄の意義を学ぶことにとどまらず、考え方、理由づけ、判断の基準というものを自分自身で考えていって、それをスピーチコンテストという形で表現するということまで発展させていく。たとえば社会科の授業で、経済や政治のことを学びますが、それにとどまらず、円の為替レートは日本経済の状況に応じてどういう影響を与え、どのように変化するのかと、3ヶ月後の予測をする。理由づけをして発表するわけです。校内だけでやるのではなく、新聞社主催のコンテストに応募して、全国2位になりました。単に政治経済の教科書の中身を理解して終わり、ではなくて、発展させて、理解力、判断力を伸ばしていきます。さらに国際理解教育では、英語の時間、英語も基本的なことは、コミュニケーションを主体とした授業の中でしっかりとやっています。それで終わりではなくて、前期課程の最終（中3）課程としてオーストラリアに160人全員を、2週間1人1家庭でホームステイをして、現地の学校に通うというプロジェクトがあります。そのプロジェクトの中できちんと自分の意図を相手に伝えるとか、相手の言っていることを理解するとか、それで2週間生活できるような英語力と異文化理解力も含めてできるようにするのが、前期課程の最終段階の目標ですね。そのために1年のときから、レシテーションコンテストをやります。これはクラスの中で暗唱大会をして、優秀な生徒3、4名が、学年大会で代表として競います。優勝者を決める。2年生では、国内語学研修をやります。代々木のオリンピックセンターで2泊3日、英語のカンヅメ。英語漬けのキャンプを朝から晩まで、英語で通すということをやります。その中にスキットコンテストというのがメニューに入っていて、寸劇と言いますかね。練習して、みんなで発表して、どれが一番よかったかというコンテストをやります。3年生になりますと、先ほどの海外語学研修に行く。英語の授業の中だけでなく、総合的な学習の時間の中でも国際理解力を高めます。現地でコミュニケーションができるような、異文化に対する理解とか、マナー、そういったものも勉強していきます。

オーストラリアでの語学研修の2週目に入るとジャパンプレゼンテーションをやります。たとえば和菓子であるとか、日本の文化の紹介ですね。最近のアニメーションも発信しますし、伝統的なものも、富士山や相撲も説明する。1時間以上かけてプレゼンするんです。そして最大の行事は、語学研修の最後に行うフェアウェルパーティー。お別れ会ですね。2週間お世話いただいたホストファミリーの方々や学校の先生方をお呼びして、生徒がおもてなしをする。たとえば桃太郎とか浦島太郎とか、英語で演劇をやって伝えたり、日本のコマとかカルタとか折り紙とか、そういうものを展示してみなさんに説明したりします。たくさんの人たちが見に来てくれて質問したり、それに答えたりします。それから男子はソーラン節を踊る。最後はウィーアーザワールド。合唱ですね。この頃になるとみんな涙流して（笑）。地域の人たち、ホストファミリーの人たちみんなで拍手して楽しんでもらって。本当にいい関係がそこで芽生えるというか、ここに来てよかったって、うちの生徒も思いますし、ホストファミリーのかたがたも小石川の生徒を受け入れてよかったと言ってくさっています。これが、単なる英語だけじゃなくて、国際理解も含めて最終的なオーストラリアに向けた勉強として、続いているんですね。

若 泉：オーストラリアにはどのような先生が引率していかれるのですか。

奈良本校長：私は毎年行っています。4年間。前任の校長（栗原先生）も行っています。やはり、いろんな問題が起こるんですよ。体調が悪くなったり、ホストファミリーとコミュニケーションがうまくいなくて誤解が生じちゃったり。毎晩ミーティングをします。その中で、状況を報告し、こういう課題があった、どうしようか。それは急な判断をしなきゃいけない場合もあります。病院に連れて行かなきゃいけないとか。そういったことも含めて判断をしてすぐ指示しないといけないんですね。安全対策マニュアルもありますけど。校長が現地にいると即断即決ができるので。即断即決をするというのが大事なことで。

若 泉：いま話されたことは、じつは保護者にとっては安心と信頼を持つ大変大事なところですよ。

奈良本校長：プラスして、次の年に行く2年生の教員が一人同行します。本校は、東京都から、グローバル10の推進校に指定されていて、そこで旅費の予算ももらっているの、さらに1名プラスして国際部の教員をつけて6名。団長として校長が行って7名で行きます。現地校、8校あるんですけど2校ずつペアにして、担任の教員が毎日2校を担当して、ある日はA校に行って午後はB校に行く。次の日はB校に行って午後A校に行って帰ってくる。2校を2週間担当します。帰ってきてからミーティングが2時間くらい。夜かなり遅くまで。初日はご飯を買いに出る時間もないうくらい大変ですけども。生徒たちは、シドニーからアドレード空港に行って、そこから8校に分かれて。簡単なセレモニーをしたあとホストファミリーに引き渡すんです。事前にデータはもらっていますけど、初対面のホストファミリーと会うわけですね。そして英語でコミュニケーションして、家に行くわけですよ、みんな、2週間も、知らない人と。しかも英語でしか通じない。1人1家庭ですから日本語を話す人はいない。すっごい心細い顔していますよ。でも毎日少しずつ話がわかってきたり、週末になるとホストファミリーがいろんなところ連れてってくれたり、楽しませてくれるんです。そうして2週間目に入るとみんなニコニコしてくる。初日は心細い顔してましたけど、帰りたくないって。最後にフェアウェルパーティーをやって、翌日には東京に帰るんですけど。朝ね。そうするともう、帰るときにはバスのところで抱き合ったりとか、感激の場面に遭遇します。それぞれ学校にはスクールバディというのがいるんです。バディってお世話役って考えるといいと思いますけど、学校での生活で一緒についていてくれる。面倒見てく

れるんです。家にもバディ。家のバディはその家族のうちの、同じ学校に通っている子供がバディとなって、通学するときに一緒に学校に行ってくれる。ホストファミリーの中にはお子さんがいらっしやらないところもあるので、スクールバディだけのところもあります。いずれにしても学校に行けばそういったバディがいて。いろいろ面倒見てくれるし、一緒に授業を受けて、わからないところは教えてくれたりしてもらっています。この関係がまたいいんですよね。だからもう、最後に帰るバスが迎えに来て、みんなが乗り込むときに、そのバディと抱き合ったりとか、涙ながらにお別れのあいさつをしたりとか、感動的ですよ。男の子もいっぱい泣いてますね（笑）。そういうところもビデオに写して、学校説明会ではそれを10分にまとめたビデオを流すんです。解説は行った生徒の代表が4、5人。これもまた素晴らしいですね。自分たちはこんなことして、こんなこと頑張ったんだ。こういう苦勞もあったとか。英語の授業の中でやる部分と、国際理解の授業でやる部分と、総合して前期課程の英語の集大成になります。

若 泉：もう一つ触れておいていただきたいのは、実用英語検定の結果が、3年生末で準2級（高校2年程度）を94%の生徒が取得する。通常あり得ない結果なんですよ。

奈良本校長：はい。そうですね

若 泉：その仕掛けをお話しいただけたら。

奈良本校長：とくに仕掛けっていうのは、英検対策はしていないんです。ただ言えることは、英語の授業を、英語を使って、コミュニケーションを中心に授業を進めていくのは徹底しています。それは、頭で考えることもさることながら、口で覚えていく、使って覚えていくというのが、うちの英語の授業のやりかたです。英語の教員は当たり前のようにやっています。

若 泉：それはどこの学校でもおこなわれているんじゃないですか。小石川はどこが違うんですか。普通にやっていて94%の結果は出るのはないというのが、一般ですよ。

奈良本校長：英検用にやっているものももしあるとしたら、英検の試験が始まる近くですね。英検対策用の講座を。それは主に、面接の練習とかですね。それが中心になっていますけど。それもそんなに長くやっているわけじゃない、直前に1回か2回ですから。高校でまあ、準2級、あるいは2級を受ける場合が多いですけど、小石川の生徒たちは、中学校の段階で準2級ですからね。やっぱり、英語の授業だけでなく、いま申し上げたように、最終的にオーストラリアに行くんだということで、それに向けていろんな勉強をしていっていますよね。ジャパンプレゼンをするにしても、何を話すか、どういう英語を使って話すか、考えるわけですね。それこそまさに思考力なんですけど。そういった、相手に何か伝えるために英語をどういうふうに使おうか、こういう言い回しはどうしたらいいか自分で調べますよね。和菓子なんか説明するの難しいですよ。小豆ってなんて言うんだってね。そういったものを、自分で調べていくわけですね。そういったものが、やっぱり英語力となってついていくのかな。英検のための勉強は取り立ててしていないですけど、やっぱり最低限のコミュニケーションができる、思っていることを伝えられる、ある情報をきちんと伝えられる、相手の言っていることも理解できる、相手に共感するような言葉も言えるとかですね。そういったものが自然に身につけているのかなと思います。それと1年生はレシテーションコンテスト、2年生はスキットコンテスト、3年生のときにリサーチ&P

レゼンテーションコンテストと呼んでいますけど、オーストラリア行ったあと、オーストラリアで学んできたこと、調べたことをプレゼンするんですよ。これもクラスごとにやって優秀者を2、3名決めて、今度は学年全体でコンテストがあって、優勝者を決める。4年生になるとスピーチコンテスト。5年生になると、今度はシンガポールに修学旅行で行きますので、そこでディスカッションするんです。ディスカッションは、自分が4年生のときに研究した内容を英語にまとめて、そこでこんなことを研究したんだよということで、質疑応答なんかをしたりする。一つ線が、1年2年3年4年5年までできている。

若 泉：英語力強化のための6年間のデザインが構築されていて、子供たちが1年後2年後のめあてをきちんと持った上で、いまの学年の英語学習に取り組んでいる。

奈良本校長：まさにその通り。

若 泉：有機的なつながりが、非常に強固に作り上げられているということですね。

土方副校長：そうですね。それは先代の校長先生からずっと形作ってきたものを受け継ぎ、伸ばしていきながらという、道筋がきちんとできているのが、小石川の強みかもしれませんね。

若 泉：初代の遠藤先生が2年、そのあと6年間栗原先生ですね。そういう点、小石川は幸せですね。思い切り構想を練った上で、作り上げるまでの期間が校長と学校に与えられた。

土方副校長：英語で言えばきちんと6年間の流れを作って、生徒たちは自然にどンドン力をつけている。そんなにできるのは、帰国子女がいっぱいいるんでしょうってよく言われるんですけど、帰国子女を調べてみたら、1学年に4、5人。ですから1クラスに1人くらいなんですよ、いても。ほとんどは小石川に入ってから英語を勉強した生徒たちなんですね。でもやっぱり着実に英語力をつけていっていますね。間違ってもなんでも、とにかく相手に伝えるんだ、相手を理解するんだという姿勢を持っていますので、上達は早いですね。

若 泉：小石川中等教育学校初代校長の遠藤隆二先生は、「小石川に入学した生徒は、先生の指示がなければ行動できないような子には、とてもつまらない学校です。何をすればよいのか、主体的に自分の頭で考える生徒にとってはこんな面白い学校はない」と言っておられました。後半は日常の学校生活や大学入試に向けた進学指導に関してお話を伺います。

## ◆2016年8月30日 小石川中等教育学校

奈良本俊夫 校長先生 土方賢作 副校長先生

インタビューその2



<都立小石川中等教育学校 奈良本校長>

若 泉：前期課程（中1～3）の生徒たちは思春期ですし、自分を出せない時期でもある。思い切り自分を出し、相手とコミュニケーションをとっていく、そういう精神面でのタフさはどこからくるのでしょうか。

奈良本校長：精神面はともかくとして、人の前で発表をする機会があらゆる教科でたくさんあります。生徒が前に出て仰々しくやる発表だけじゃなくて、授業の中で自分の考えを発言させるとかですね。数学の時間だって、先生が黒板に書いて解き方を教えるだけじゃなくて、どんな観点からこの問題とらえたらいい？とか、この先にどんなことが考えられる？というようなことを生徒に問いかけて、生徒がそれに対して自分はこう思うとかって言う。そういう場面がたくさんあります。ましてや他の、社会科とか国語とか英語なんかはたくさんありますね。ですから、一般的に生徒に考えさせて、生徒に述べさせる。そういう機会がとても多いと思いますね。自然に話す機会が多いですから、あまり抵抗なくできるようになるんです。とってもいいのは、人が言ったことの足を引っ張るようなことをあまり言わないですね。いい考えが出ると自然に拍手が出たり。それを担任の、いい考えだよとか、素晴らしいとか、自然に認めて拍手をしたり誉めたり、そういういい関係があります。もちろん茶化したりすることもありますけども、全体的に言うとそれは少ないほうですね。

若 泉：そういう教育空間、場の空気が教室にあることによって、子供たちがのびのびと考えを表現できるということにつながる。それはひょっとしたら、教員同士、事務・用務員のかたも含め、それぞれが自分の思ったことを言っても、それで糾弾されたり変な思いをしたりしないというような空気感が広がっているということでしょうか？それは非常に大切な事だと思いますね。伸びる企業でいま研究されていることなんですよ。そういうものが始めからあったのでしょうか。それともやっぱり作られてきたと言えるのでしょうか。

奈良本校長：みんなで作り上げてきたんじゃないですかね。先生がたもそういうものはきちんと授業の中でも話をしますし。別に授業だけじゃなくても、いろんな活動をする。ホームルームをやったり学年活動をやったりするときでも、そういうことは常に言っていますよね。それは大事ななと思いますね。学期ごとに始業式・終業式に、そこまでに生徒がとったいろんな賞状とかカップだとか盾だとか、体育館で前に出てあらためて渡す機会があるんですけど、そのときに自ずから拍手が出ますからね。そういうのが当たり前になっていて。茶化したりというのがないですよ。

若 泉：【出過ぎた杭は打たれない】どころか、みんなから羨望のまなざしで見られるということもあるわけですが、出過ぎた杭の生徒たちも何人かいるのでしょうか？

奈良本校長：それはいますよね。SSHの賞をとってくる生徒なんか素晴らしいですからね。

若 泉：どういう点で素晴らしいと。

奈良本校長：たとえば2年くらい前に、3Gだったかな、小型のコンピューターみたいなものを使って、それをどんなふうに活用できるか、企業の活用アイデアコンテストがあって。うちの生徒が優勝したんです。2位が慶應の大学生だったかな。それくらい、アイデアでは中学生のレベルじゃなくて、大学生と肩を並べるくらいアイデアを出せるんですね。そういう、出過ぎている子も（笑）。

若 泉：そういう生徒を、他の生徒たちはどう見ているんですか。

奈良本校長：すごいやつだなあと思っていますよ、みんな。

土方副校長：生徒たちにとってアンケートで、それを学校説明会でよく情報提供するんですけど、がんばる生徒を馬鹿にしない雰囲気があるというのを、やっぱり生徒たちがそう感じていて。それをお伝えすると、ああ、いいですねってみなさんおっしゃってくださるんですよ。

奈良本校長：1年生から6年生までいろんなアンケートをとるんですよ。小石川のよいところを挙げてくださいというときに、そういうのを挙げますね。中学や高校では、気分的に、何か言うと馬鹿にされるとか、足を引っ張られるとか、からかわれるとか、ありますよね。

土方副校長：そういう歳頃って、あるじゃないですか。

若 泉：ありますよね。からかいが必ず出てきます。

奈良本校長：それがあまりないと。それで気分がいいということですよ。そういうのがないので、自分も人前で発表したりするのに躊躇しない。そういう機会がたくさんあるというのと、教員も指導しますし、生徒も茶化されることなくできるので気分が軽い。発言もできますし、いろんな生徒が質問したりする雰囲気ですので。また、5年生6年生がそうやっているのを1年生が見ているのがいいです。2年生も。先輩の背中を見ながらやるというのが素晴らしいですね。これがとっても相乗効果ですよ。

若 泉：そうしますと中等教育学校で、異学年の縦関係の中で、下級生も上級生の動きをみながら、あこがれも抱きながらそういう上級生になりたいと。上級生も、幼さの残る下級生と触れ合いながら、いかに自分たちの考えを伝えていけるか、そういうことが非常にうまく回っているなどというご実感ですかね。

奈良本校長：そうですね。それはありますね。いま盛んに学校祭の練習をしていますけど、それも最終的には5年生が中心になるんですよ。5年生が委員会やなんか全部仕切る。6年生はもうそこから解放されて演劇を 思う存分やるわけです。5年生が組織を動かす。4年生は5年生を見ながら、1年かけてだんだん覚えていく。5年生がいなくなったら自分たちがやらなきゃいけない。きちんと組織の引き継ぎができていますね。

土方副校長：今日なんかもリハーサルをやっていますけど、全部自分たちで運営して、1年生の子たちを先輩が指導しています。

奈良本校長：前期生はそれを見ながら、だんだんと自然に学んでいく。例えば、いろんな講演会をやったときに必ずうちの生徒は手を挙げて質問するんですよ、終わったあと。マイクがあるところに、ぞろぞろ。質問しているうちに次の人が来たり。必ず、「今日いいお話を聞かせていただいてありがとうございました」と言うんですよ。で、「ちょっと質問させていただきたいんですが」って。そういう何気ない一言ですけど、必ず言える。それは誰も教えていないんですけど、先輩たちを見て。講演会は全校生徒で聞きますのでね。そういったところで低学年の子たちも先輩の姿を見ながら学んでいっている。それはやっぱり大事なことです。本校では学校祭で、むしろ6年生が最終的な集大成で、一番レベルの高いものを行っている。みんなの憧れとなるものですね。それを目指して1年生からステップを踏んでいって。自分たちが作り上げるという自負を持ちながら。よりいいものを作ろうという姿勢が見られる。それはとっても、社会に出てから大事な資質能力だと思うので、それはむしろ歓迎して、奨励して、やらせていますね。1ヶ月くらい早く受験勉強を始めさせるよりも、そのほうが力がつくんじゃないかなと思いますね。6年生は1時間以上かけた演劇をやるのが伝統であり、自分たちの誇りですから、全員で、大道具、小道具、照明、音響、役者、全部含めて全員体制でやっています。

若 泉：後期課程の進学指導につきましても、どのような手を打っておられるのか。入学当初の適性検査を経て入ってきた生徒たちの学力をどのように伸長させてきたのかということに入ります。

奈良本校長：いま6年生は選択科目が多いので、1、2時間目はとっていないという生徒もいるわけですよ。その子たちも朝8時半に登校させていますので、1、2時間目はないから3時間目から来るということとはさせていない。ちゃんと8時半全員出席をとって。そのあと、授業のない生徒は図書



室に行ったり、自習室に行ったりして勉強させる。何を勉強するのは本人にまかせていますので。そういうシステムをとっていますね。

若 泉：1月以降の、センター試験まではなんとか学校に来させますが、それぞれ私立も受けるでしょうから、登校する生徒がまばらになってくるわけですよ。1月から3月までの期間、学校がどのように生徒に関わっておられるのか。

奈良本校長：2学期の期末テストまでは普通にやっています。期末テスト以降は、駿台のパックファイブというのがありまして、センターの模擬試験のようなものです。それを毎回やっていく。自分でとっている講座の中でやっていきますから。年が明けると1週間しかないので、シミュレーション模試。センター試験と同じ時程で、同じ科目で、センター試験をおこなうシミュレーションをやる。教科と教科のあいだの空き時間がこんなにあるんだということも体験できるわけです。その時間をどう使うかというのも大事ですし、それから、自分で選んだ科目を書き忘れたとか、そんなミスが結構あるんですよ。そのシミュレーションを直前にやっていくので、そういう間違いはズいぶん減ってきているんだと思います。12月、パックファイブをやり、1月の頭はシミュレーション模試をやり。あとは、センター試験が終わったら今度は個別ですね。受験科目のそれぞれを生徒が自分で計画を立てて、過去問を中心に持ってきてわからないところを先生に聞くことが、毎日のように行われています。そこが、ある意味では最後の合格者を増やす増やさないの大きなポイントだと思いますよね。どれだけ個別指導をやっているか。ただ、もちろん生徒が求めなきゃ話にならないけども。そこは生徒が本当によく聞きに来ますよね。

若 泉：そのあたりが、1回目の卒業生を出した段階ではまだあやふやな体制だったのかなあと。

奈良本校長：うーん、1回目のときは私はいなかったですけど、まあよく聞いているのは、精神面のケアがまだ十分できていなかったと、予想外だったというのがありましたけど。たぶん二次試験の対応について、なかなか十分な対応ができていなかったところがあったかもしれませんね。

若 泉：直前の精神面のケアを含め、進学指導体制が、普通の進学指導重点校における3年段階と、中高一貫校の場合とで、違っているのか、同じことをやればよいのか、どうなのでしょう。

奈良本校長：うーん、中等教育学校の場合に、いわゆる5年生の段階で、英数国についてはほとんど高校で学ぶ部分については終了している。ひとつとおり。社会理科はなかなか時間数の関係で5年生で終わるといわけにはいかないんですが、いわゆる基礎となる英数国は5年生でひとつとおり終わっているという部分は、3年制の進学重点校とは、違いがあるんじゃないかと思います。

若 泉：そうですね。

奈良本校長：かなり時間をかけられるというのはありますよね。それで最終的に、センターが終わってから二次対策についてもペースが早く、内容も濃くできるんじゃないかと思います。理科社会についても、進学重点校も、積み残しがあって補習をしないといけないと思いますね。中等教育の場合は少なくとも英数国の部分が比較的早く、5年生の段階で進んでいるので、それに上乗せした補習が、演習的なものを6年生になって結構できますので。それはやっぱり、プラスにな

っているんじゃないですかね。それをベースに二次対策を早く進められる。そういう面ではずいぶん違うかなと思います。

若 泉：センター試験が終わったあと、国公立の二次試験のあいだにおける、メンタル面での強化と云いますか、励ましとか寄り添いとかいろいろあると思いますが、そのあたりの工夫としてはどのようなものが。

奈良本校長：もうほとんどが担任ベースでやっていますけども、センターの結果が出て、自己採点やっていますよね、1週間くらいのあいだに。それを担任がもちろん指導するんですけど、その前に目線合わせというのをやります。つまり、出願を東大に出したかったけれども、東大にそのまま行くか、あるいは東工大にするかというのは、センターの結果で、どう見るかというのは、なかなか難しいものがありますよね。データを出してくれた予備校のかたに解説をもらったり、進路のほうでそれをしっかりと把握した上で、分析をして、それを今度は担任を交えて、こんな感じだと。主だった生徒に対しては個別に、どうしたらいいか。ここここに出願しているが、どうなんだろうということ、意見交換して行って。そういう意味での目線合わせをした上で、個別に生徒に話をしていますから。ただ、基本はセンターの結果でこっちに行かせる、東大じゃなくてこっちに行かせるというような指導はしていないんですよ。話をしていく中で生徒が変わることはなきにしもあらずですけど。基本的には、自分が生きたいと思うところを貫くように話はしています。経済的にどうしても浪人はできないという子もいますから、全部が全部そうやって通すわけじゃないんですけど。そこではかなり時間をかけて個別指導をしていますね。

若 泉：国公立二次試験の前に生徒たちはきちんと来ているのか、それとも予備校まかせにしているのか。

奈良本校長：予備校は少ないんじゃないですかね。ほとんど学校に来て勉強しています。

若 泉：次に私立に受かってしまった、あるいは推薦・A0入試等で受かった、この子たちに対する対応はどうか。

奈良本校長：たとえばセンター試験は受けさせています。

土方副校長：そうですね。推薦の生徒はそんなにいないですよ。ほとんどの子が、一般入試が圧倒的に多いですから。推薦を極力受けないようにと言うと変ですけど。

若 泉：そういう点では学校で一致団結して立ち向かうよという場が作られているということですね。

奈良本校長：それは保護者にも話を。6年生だけじゃなくてもっと前の段階から折りにつけ話をしていますね。推薦に行く力が本校レベルであれば、一般で受けたって充分通ると。国立の推薦は、受けたという者には受けさせていますけど。あとは私立でいうと、早稲田慶應は1名ずつくらいですよ。ほとんどの大学で指定校推薦を受けているけれども応募がないという状況ですね。

若 泉：適性検査では、社会科を中心に、教科横断的な問題を、資料の読み取りから、その数値をどう

扱うか、さらに、もっと広い視野を持って国際社会の中で自分はどんな考えを持って、どう行動していくかという、そこも一貫してきちんと出している。それは本校の教育にどう繋がっていくのか。入学してからの探究活動がありますから、そういうときに資料を適切に選択し、そしてそれを使って自己表現していくということがあるんだろうと思いますし、もっとよく考えて、自分なりの発想をきちんと発信するんだということもかかわってくる。そう理解してよろしいのでしょうか。

奈良本校長：そうですね。その中心が、小石川フィロソフィーという課題研究学習なんですね。今年から1年生は小石川フィロソフィーとし、2、3、4と5年まで行くんですけど。いままで1年生2年生のときにはそういう名前はついていなかったんですけど、研究をしていく上での基本的な国語力、表現力、コミュニケーション力を1年生で学び、2年生では数学的な見方、統計的な見方ができるように1年間やっていたわけです。3年生で初めてプレ課題研究、4年生で本格的な課題研究が出てくる。これは課題研究ですから、やっぱり自分で課題を見つけて、自分でテーマを見つけて、そして仮説を立て、実際に実験等で検証して、その仮説が正しいと証明した上で導いていく。これが小石川フィロソフィーの研究で、別に理数に限らず、国語もあるし、社会科もありますし、そういったものを、先ほどおっしゃっていたように、課題の中で自分のテーマを決めたり、自分の考えを述べたり、考察したりする、そういった機会が当然研究の中にあるわけなんですね。それが適性検査で、自分でこれを、たとえばすべらないようにするにはどうしたらいいか考えを述べなさいとか、適性検査にありますよね。あなただったらどういう工夫をしますか。すべらないかどうか、あなたならどんな実験をしますか。この手のものが多いですよ。それはやっぱり、答えが一つではなくて、あなたの考えを、ただ言いつぱなしではなくて、どうしてその実験でわかるんですかと問いかけているわけですよ。それが実際の小石川フィロソフィーの中では、自分なりに疑問を呈して、自分の考えをそこでまとめていく。きちんとしたデータに基づいて。数値であり、理科やなんかの実験であり。そういったものをもとに、自分の考えをまとめて、一つのプレゼンをそのあとにしていく。そういうサイクルに、つながってきているんですね。小石川フィロソフィーは本当に、そういう意味で考える力、説明する力、表現する力、そういったものが育ってきているんだなあと。それが最終的に総合力となって二次試験なんかにつながっていくと私は考えているんです。二次は単なる知識理解じゃ済まないですよ。

若 泉：とくに昨今のトップ校の問題は、非常に総合的で、日常の中で考え続けていかないとなかなか表現できない問題になっているかなという気がします。そういう点では、新しい大学教育改革および高大接続に向けても、小石川はきちんと手を打ってきた。必ず力がよりよく発揮されるんじゃないかという希望を持ってよろしいんですかね。

奈良本校長：私もそう考えています。生徒についてこの間、その話をしたんです。そういう答申とかいろいろ出ましたけど、怖がることはないよと。まず君たちはこの学校に入るときに、適性検査を受けたじゃないか。あれがまさに思考力判断力を問う問題で、大学はそういうものを出そうとしているんだよということで。学校に入ってから、こういった授業、小石川フィロソフィーと一緒にいろいろやってきたでしょう。学校祭のためにみんなで知恵を出して、どうしたらうまくいくのか、やってきたでしょう。そういったことがいま時代で求められている力なんだ。答えがない問題を、みんな協力してアイデアを出し、知恵を出し合って、解決策を立てて、みんなできりこむ。そういう力が求められているんで、そういう力がついたかどうかを、大学入試

でも求めたい。それは小石川の6年間の授業でこんなにいっぱいやっているじゃないか。だから心配することはないんだよと言いました。

若 泉：非常に力強いお話だと思いました。

奈良本校長：ありがとうございます。

若 泉：いま都立一貫校は進学実績を、人数じゃなくて率で出そうという傾向があります。そして今後は、いままでの高校入試の偏差値の序列や大学の序列も大きく変わってくる可能性があります。大学入試制度や高校改革が叫ばれていますが、小石川中等教育学校は特別な対策を新たに立ち上げなくても、これまでの教育活動をさらに充実する中で、6年間の教育で実績を上げていくのかなという印象を持ちました。

奈良本校長：幸い、同窓会からはとっても評価していただいて。たとえば、（校門のすぐ前の校舎に垂らす）垂れ幕が最大9本までできるんですけど、物理チャレンジとか。あそこは全国大会レベルしか飾らないんです。するとこの近辺を通った人、あるいは住んでいる人が見て、もう1個増えたねとか、新しいのができたね、今度は美術？ フィルハーモニー？ いままでみたいな化学とか物理だけじゃなくて、フィルハーモニーオーケストラが全国大会出ましたし、美術の作品も全国大会に選ばれて行ったり。科学の甲子園なんかは、6科目のそれぞれの代表が出て、チームワークとして総合点で争う。それで東京都で優勝したんです。代表になって。開成を抜いて（笑）。それで全国大会に出て。全国大会では14位。総合力ですからね。そういったものを飾ってあると、みんな、すごいねって。やっぱり誇らしげになるということで。最初（文教地区の中高一貫校に小石川高校が指定されたころ）はたぶん、中等教育学校っていったい何なんだと。中学校か？と思っていた人もいっぱいいたと思うんです。もちろん、伝統ある小石川高校です。創立当時からしっかりした教育目標があって、自由な校風で一生懸命、独特な雰囲気を出しながら。もちろん卒業生もたくさん立派な人たちがいて。成功している人もたくさんいるわけで。そういったものがある中で、都の施策で、自分たちの学校の名前がどこまで残るかわからないし、そういったもの（中高一貫校）ができる、そんなのは黙ってられないというのは、小石川だけでなく、他の一貫校でも開設前にはあったと思うんです。そういうのは、あるからいいとかいけないとかじゃなくて、あるのが当然かなと私は思うんです。でも、それを理解していただくためには、きちんとこんな学校で、こんな生徒も頑張っているし、実績も出ているし、評価もされているんですよということを、実際に実績を積んでいくことが、説得材料になるんじゃないかなと。そういう意味では、遠藤先生の頃から、国際理解教育のビジョンをきちんと作った上で、オーストラリアまで行って、調査をしたり。そういったところから始まって、しっかりしたものができあがってきたので、OBの同窓会の人たちも、すごく喜んでくれて。毎年1回、評議委員会って同窓会の委員会があるんですけど、そこではこの1年間の生徒の頑張りということで、表彰を受けた生徒の一覧表をお渡しして、こんなに頑張っていますよって。とっても喜んでいただいています。ですから、今いろんな支援も同窓会からしていただいています。生徒たちのね。とってもありがたいですよ。

若 泉：尽きることはないんですけど、お時間でございます。本日は大変ありがとうございました。

奈良本校長：こちらこそ、ありがとうございました。

（インタビュー終了）